地域の底力――青森県青森市

官民の連携を礎に市民の力を引き出し 未来への前進を図る青森県青森市

歴史や祭り、アート、あらたな特産品と、市民が秘めた自由で力強いエネルギー。青森県青森市では、日常に馴染み埋もれた世界に誇れるまちの魅力を掘り起こし、活性化を目指す取り組みが進められている。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

青森市郊外、県内をはじめ国内外から多くの来館者がある「青森県立美術館」のシンボルともいえる展示が、美術家の奈良美智氏が手がけた『あおもり犬』だ。高さ約8.5メートル、横幅約6.7メートルのこの作品は屋外に設置され、天気や季節により表情を変えていく。

奈良美智《あおもり犬》2005年 Artwork © Yoshitomo Nara

「多くの人が行き交ってきた港町だからでしょうか、青森市民には“よそ者”を受け入れる寛容さがあるように思います」と話す、市長の西秀記氏。まちづくりでは、市民参加型の取り組みを進めている。

祭りを支える市民の力をまちづくりにも

青森県青森市は県中央部に位置し、県庁所在地として県の中枢を担う人口約二七万人の中核市だ。小売・卸売業、金融業、サービス業といった第三次産業が経済の柱を成すまちが最も賑わうのは、八月二日から七日まで開催される「青森ねぶた祭り」。例年、六日間で延べ約三〇〇万人の観光客が訪れ、インバウンドの人気も高い。

一方で少子化や若い世代の流出による人口減少、高齢化が進み、郊外型大規模店舗の影響を受けた商店街の活性化も長年にわたる課題になっていた。しかしながら官民それぞれの尽力が少しずつ実を結びつつあると話すのは、二〇二三年六月に市長に就任した西秀記氏だ。

西氏は衡器事業を営む傍ら、青森商工会議所のほか地域経済を牽引する団体の一員として、現職に就く以前からまちづくりを推し進めてきた。その転機にあたり掲げたテーマは、「市民力＋民間力 AOMORI 次なる舞台へ」。

「大都市とは異なり、地方都市では誰かが何かをしてくれるのを待っていたら何も変わりません。まちの活性化には市民の皆さんに関わってもらいたい、自分がやるという意識を持ってほしい。これまでの活動に込めた思いは、立場が変わった今も同じです。市民の力、企業や各種団体といった民間の力に行政の力を合わせれば、青森市はもっと上の舞台へと進んでいけると思っています。実際、青森市民には青森ねぶた祭りという成功体験があるのですから」

祭りの主催は青森観光コンベンション協会、青森商工会議所、そして青森市。山車の製作は企業や各種団体が担うが、はやしやハネトと呼ばれる参加者の多くはそこに属さない一般市民なのが、ほかの大きな祭りではあまり例のない特徴だ。

「祭りを盛り上げるのは、市民一人ひとりの力。もっと誇りに思っていいはずですし、そのエネルギーをまちづくりの活動につなげていきたいですね。青森市には魅力的なコンテンツが多いと、外からは評価されるものの、市民が気付いていないのも課題です。それらをあらためて掘り起こし、シビックプライド（地域に対する市民の誇り）につなげられればと考

2019年落成の市庁舎は自然採光など環境に配慮した設計に加え、地場産品PRのためのマルシェなど、市と市民の共同催事ができる場が複数設けられている。

祭りに出陣した大型ねぶたを展示する「ねぶたの家 ワ・ラッセ」は、市内屈指の人気を誇る観光施設。銅板を使いつつ柔らかなラインを描く外観が特徴的だ。かつてねぶたの多くは祭りの後に廃棄されていたが、和紙をクラフト作品に再利用するなど、アップサイクルの取り組みが進む。

市内南西部の浪岡地区をはじめ、青森市内ではりんごの栽培が盛ん。秋から冬にかけては、街中の青果店や土産物店にりんご箱が並ぶ。

えています」

その掘り起こしの一つが、まちの歴史。一六二五年、江戸幕府に津軽藩の米を運ぶ拠点として港町「青森」が生まれたが、史実が胸に刻まれていない市民も多いという。

「小中学校ではふるさとを学ぶ教育が行われているものの、第二次世界大戦の空襲によって市内には歴史的建造物がほぼ残っていないため、歴史が浅いと誤解している方たちが少なくありません。そうした認識を修正するためにも、青森開港四〇〇年を迎える二〇二五年に向けて記念事業の準備を進めています」

周遊観光につながる美術館の広域連携

地域に由来するアートも、西氏が掘り起こしを狙うテーマの一つ。要となるのは、青森市出身の版画家・棟方志功や弘前市出身の美術家・奈良美智など、県ゆかりのアーティストの作品を所蔵し、東北地方の美術館では最も多い集客を数える「青森県立美術館」だ。

「弊館、青森県、教育委員会を含む青森市の思いがつながり、垣根を超えて連動が進む現状は、県内のほかの市町村にとってもプラスになっていくと思います」。そう語る青森県立美術館館長・杉本康雄氏（棟方志功展示室にて撮影）。

館長の杉本康雄氏は地元の銀行の頭取、会長職を経て、二〇一五年から現職を務める。

「弊館で最も高い人気を誇るのは、奈良美智さんの作品です。来館者の半数が彼の作品目当て、ということもあります。マルク・シャガールが描いたバレエの舞台背景画『アレコ』の展示ホールでは、コンサートや舞踏、演劇といったパフォーミングアーツが展開できるのも、弊館の特徴です」

公立美術館は一般的に教育委員会の傘下というケースが多いが、青森県立美術館は県の観光国際戦略局の管轄であり、開館当初から観光に主眼を置いている。その目的をより広域で展開するために杉本氏が牽引してきたのが、

開館10周年を記念して制作された「Miss Forest / 森の子」をはじめ、青森県立美術館は奈良美智氏の作品に関して世界最大のコレクションを所蔵する。奈良美智《Miss Forest / 森の子》2016年 Artwork © Yoshitomo Nara

建築家・青木淳氏が設計した青森県立美術館の建物は、隣接する「三内丸山遺跡」の発掘現場に着想を得たという。

館内の案内表示は、水平・垂直・斜め45度同幅の直線だけで構成され分かりやすいオリジナルフォントを使用。そのほか美術館のシンボルマークからピクトグラムまで、ヴィジュアル・アイデンティティーはグラフィックデザイナー・菊地敦己氏が担った。

二〇二〇年にスタートした「五館が五感を刺激する―AOMORI GOKAN」プロジェクトだ。

同館同様に現代アートを主軸とする四館（「青森公立大学 国際芸術センター青森」「弘前れんが倉庫美術館」「八戸市美術館」「十和田市現代美術館」）との連携により、アートを旅の目的として県内を周遊する楽しみを全国に発信。その効果は徐々に現れているが、立ち上げには苦労があった。

「銀行業務において合併、統合のお手伝いをするというのは日常的な話ですから、公立の美術施設が五つあるなら協力してなにかできるのではないかと単純に思ったんです。とはいえ県立の弊館を含めてそれぞれに管轄が異なり、会計の仕組みや担当セクションも違う。スタンスがそろうまでには時間を要しましたが、銀行時代の経験と人とのつながりが扉を開いてくれました」

二〇二四年四月から九月には、初の共同企画展「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」を開催。前年に東京で行われた記者発表会には、美術関係者やメディアだけではなく旅行業界からの出席者も多く、プロジェクトが持つ高い可能性を実感したという。

杉本氏が目指しているのは、美術館巡りを介して国内外の観光客に青森の食や文化を楽しんでもらうのはもちろん、地元の人たちにも県内の地域性の違いに触れてもらうこと。

「今後は、地域の子どもたちに向けたアート教育も広げていければと思っています。デジタル化が進む時代、人間の感性を育む環境づくりが今まで以上に重要になります。それを担うのが、これからの美術館の役目。棟方志功の影響もあり、青森市では版画教育がもともと盛んですが、その仕掛けをあらためて見直すことも市と相談して進めています」

ユニークなアイデアで縄文文化を身近に

縄文文化もまた、アートと並ぶ青森市の大切なコンテンツ。

小牧野遺跡の出土品や縄文時代の変遷を案内する展示施設は、説明文の振り仮名やパネルを設置する高さなど、子どもたちの視点を意識した工夫がなされている。

「縄文の学び舎・小牧野館」館長の竹中富之氏は、ラジオやテレビなどメディアを介した情報発信も積極的に行う。竹中氏がかぶる遮光器土偶がモチーフのニット帽は、抽選販売が行われるほどの人気の品。

二〇二一年に世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一七の構成資産のうち、市内には二件の資産がある。大規模な集落跡が出土した県管轄の「三内（さんない）丸山遺跡」と、祭祀（さいし）の場とされる市管轄の「小牧野（こまきの）遺跡」だ。

後者の小牧野遺跡は青森湾を望む高台に位置し、直径五五メートルの環状列石とともに二〇一五年開館の「縄文の学び舎・小牧野館」の展示を見学できる。加えて館内のショップやインターネットで販売する、オリジナルグッズが若い世代を中心に話題を集める。ニット帽、木製メガネ、けん玉など、環状列石や土偶がモチーフのラインアップは多彩で、遊び心のあるデザインだ。

ミュージシャンや音楽系ミュー

縄文時代後期前半（約4000年前）に作られた、小牧野遺跡の環状列石は三重構造（一部は四重）。このほか2軒の竪穴建物跡、土器棺墓や土坑墓群などの遺構も見つかり、400点以上の三角形岩版をはじめ、祭祀に使われたと推測される多数の遺物が出土している。
出典：JOMON ARCHIVES（青森市教育委員会撮影）

環状列石や土偶をデザインした、オリジナルグッズの数々。

ジアムの責任者、雑貨店勤務を経て東京から帰郷した、地元出身の館長・竹中富之氏は就任時の思いを振り返る。

「僕らが子どもの頃、矢じりはかっこいいけれども土器の破片は見つけても要らない、というくらいに縄文時代の名残は日常的な存在でした。とはいえ知識があったわけではなく、二〇年以上故郷を離れていたこともあり、館長としてはゼロからのスタートでしたが、歴史をひもとくのが面白かったですね」

竹中氏は、遺跡や文化により深く触れてもらうためには、入り口のハードルを低くする必要があると考えたという。

「くすっと笑えるような、ユーモアを感じさせるグッズがあれば、縄文文化への関心の裾野を広げてくれるのではないかと思いました」

世界文化遺産登録は、コロナ禍の真っ最中。三度の休館を強いられたものの、インターネットを中心に発信を続け、規制が解除された現在は来訪者の数が少しずつ増えてきた。高校生をはじめ、グッズに惹（ひ）かれてという人も多いそうだ。イベントや、県内のクラフト作家と組んだワークショップも開催されている。

「縄文時代は文字による記録が残っていない分、想像の余地があります。そのロマンを縄文が大好きな小学生は、正解がないからこそ面白いと言ってくれます。ロマンと考古学の両輪のバランスを取りながら、小牧野遺跡と縄文文化の旗振り役に徹し、さらにファン層を増やしていきたいですね。津軽地方には、『モッケ』という方言があります。ノリがよくて熱しやすいお調子者という意味ですが、楽しそうに旗を振る人がいれば、乗っていくのがモッケ。ねぶた祭りでお分かりのように、そのパワーは強力です」

多角的な展開を生む藍が秘めた多彩な力

青森市のあらたな特産品としては、「あおもり藍」が注目の的だ。二〇〇六年に発足した「あおもり藍産業協同組合」では休耕田を活用して無農薬で藍を栽培し、藍染商品や染料に加えて、お茶、石けん、抗菌・防臭アイテムなど幅広い商品を販売している。しかしながら、当初の目的は違っていたと話すのは、代表理事の吉田久幸氏だ。

「藍の業界においてわれわれは後発ですから、なにかしら新しいことをやらなければならない、という思いが挑戦につながりました」と語る、あおもり藍産業協同組合代表理事の吉田久幸氏。

藍染めの量産に加えて濃淡８色の染め分け、品質の均等化や高い再現性もあおもり藍の特徴だ。衣料品から抗菌グッズまで、オリジナル商品は多数。

あおもり藍の無農薬栽培には、新規就農者が参入した。染料の材料になるのは、葉の部分。吉田氏の心を動かした鮮やかな色合いの花は、秋に畑を彩る。
写真提供：あおもり藍産業（株）

「二〇〇三年に藍の花を目にする機会があり、美しさに魅了されました。休耕田で栽培すれば、景観で地域おこしができるのではないか、と思ったのが、そもそもの発端です」

研究会を立ち上げ、大学や金融機関の協力を得て独自の染料生成・染色技術を確立。一〇〇パーセント天然ながらも色落ちしにくい染料の開発、抗菌・防臭効果がある無色透明の成分の抽出、口にしても安心安全な食品といった多くのアイデアが実り、あおもり藍の世界が広がっていく。

「長年、縫製業界に携わってきた私をはじめ組合員は皆、異業種からの参入で、藍に関しては素人でした。失敗する怖さを知らず、自由に発想できたのがよかったのかもしれません。しがらみもないため、活発な意見を交わすこともできました」

二〇一〇年、あおもり藍の抗菌・防臭性が認められ、宇宙飛行士の山崎直子氏が藍染めのポロシャツを着てスペースシャトルに搭乗したことで大きな飛躍が訪れる。市民の認知度は高まり、有名百貨店や国内外の人気ブランドなどとのコラボレーションも生まれた。

コロナ禍では、マスクや抗菌スプレーなどの需要が急増。藍の抽出成分は農業や医療の分野でも効力を発揮することが判明し、今なお多方面で研究が進められている。

「藍の多様な応用性は分かってきましたが、エビデンスを得てより広く認知されるまでには時間がかかると思います。商売としてはまだまだこれからですから、次世代につないでいきたいですね」

現在の栽培面積は、全国三位。幕開けからわずか二〇年という期間を考えれば、活用の幅はさらに広がっていくことだろう。

高校生と地域をつなぐ商店街で学ぶ「塾」

若い世代もまた、地域のために活動を重ねている。その一つが、高校生がまちづくりについて考える二〇〇九年発足の「あおもり若者プロジェクト クリエイト」だ。地域社会の課題をコミュニティを通じて解決しようとする活動が評価され、二〇二三年には東北電力が主催する「東北・新潟の活性化応援プログラム」において最優秀賞を受賞するなど、今後の取り組みへの期待は大きい。

発足時からクリエイトをリードしてきたのは、代表の久保田圭祐氏。活動の中心は、メインストリートを軸に広がる商店街の協力を得て二〇一四年に始まった「クリエイトまち塾」だ。

「例年、クリエイトまち塾は六月にスタートし、クラス分けの後、

「コロナ禍では、まち塾の活動が一時期中断されました。とはいえスタッフが先々について話し合い、高校生が主役となって地域を巻き込んだ再生に取り組んでいく『一人称のまちづくり』という活動の原点を見つめ直す機会になりました」と振り返る、あおもり若者プロジェクト クリエイト代表の久保田圭祐氏。

あおもり若者プロジェクト クリエイトが整備に関わった「あおもり駅前ビーチ」は、観光客の撮影スポットに。高校生やファミリー層など、若い世代が集う場にもなっている。

クリエイトまち塾の授業は、活動に賛同した商店街の店主が営む店舗内で行われる。生徒たちがメッセージをつづった色紙には、担任を務めた店主への感謝の思いがあふれている。

商店街の有志が担任となって意見を出し合いながら年度末に向けてまちづくりの企画を提案していきます。卒業生は役所や銀行など、地域と密接に関わる仕事に就くことが多く、クリエイトまち塾のスタッフとして協力してくれる人もいます」

二〇二三年度の塾生は一八人。活動には、外部講師による講義やフィールドワークも含まれ、トライアルながら企画が採用されて、高校生が商店街の魅力を語り部のように伝えるツアーを実施したこともある。担任を務める商店街の関係者にとっても、「勉強になる」「新しい視点をもらえる」など、刺激になっているそうだ。

そんなクリエイトの立ち上げは、二〇一〇年の東北新幹線全線開業がきっかけだったという。

「開業前はストロー現象への懸念が多く聞かれ、地元の人が地域の魅力に気付いていないのではないかと思いました。ならば自分たちで見つけ、ブラッシュアップしようと試みたのが、発足のきっかけです」

創設時のメンバーは、久保田氏の中学校や高校の同級生だった五人。企業の助成金を得てラジオやフリーペーパーによる情報発信を進める過程で、商店街とのつながりが生まれた。久保田氏自身は、二〇一一年の高校卒業後に東京の大学に進学。現在は東京で公務員として働く傍ら、地元に定期的に帰り活動を続けている。

「高校時代はともすれば、家族や学校、学習塾の先生ぐらいしか大人との接点がありません。ですから、地域への思いが強い商店街の方たちに接することで地元の良さに触れられる経験を、後輩たちにも感じてほしい。クリエイト創設時に比べ青森のまちの姿や高校生の思考が変わっていく中、プレイヤーとして関われるのを面白く感じているのも、活動を続けている理由です」

産学金官が手を組み探る未来の可能性

まちが、変わってきている……。一時期は商店街のシャッター街化が懸念されていたが、例えばメインストリートの「新町商店街」では空き店舗率が一〇パーセントを切っていると、市長の西氏は顔をほころばせた。

「洒落（しゃれ）た店が生まれて、そこから連鎖反応が起きているのが嬉しいですね。Uターンも、わずかながら増えています」

そのための仕事づくりをまちを挙げて考えたい、と西氏が立ち上げたのが「青森市しごと創造会議」だ。産業、学術、金融、行政の共創による今後の新しい産業振興の具体的な戦略の検討を通じ、市民所得の向上や雇用促進など地域経済の活性化を図ることを目的とす

JR青森駅から続く商店街では、車止めに縄文時代の土偶オブジェが飾られており目を引く。写真はクリスマス仕様。

かつて津軽海峡を行き来した青函連絡船「八甲田丸」は、「青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸」として展示施設になり青森港の景色を彩る。

鮮魚店に並ぶ新鮮な魚介類を選び、自分好みの海鮮丼をつくる「元祖『青森のっけ丼』」が人気を集め、JR青森駅近くの市場「青森魚菜センター」は観光客で賑わう。

る。そこで見えてきた方向性の一つが、青森市が遅れている分野でもあるDX（デジタルトランスフォーメーション）。

「GX（グリーントランスフォーメーション）にも、着目しています。これから洋上風力発電が進むと言われるのが、北海道から北東北エリアの日本海側と津軽海峡。青森港はそのエリアの真ん中に位置するため、拠点港としての指定を目指しています。仮に指定を受けることになれば、メンテナンスやリペアといった関連産業も生じるでしょう」

観光面ではアートや縄文遺跡などに加え、二〇二三年だけでも青森港が計三五回迎えた、国内外のクルーズ船への期待も高まる。

「マーケティングも、重要な要素です。小売・卸売業に携わる人たちが持つネットワークを活用し、青森市の魅力あるものを全国に発信していきたい。この効果は青森市の魅力の拡大にとどまらず、市の財政にとっても重要だと考えています」

民間、行政の垣根を超え、さまざまな分野で次の舞台に向けた太鼓がたたかれている。いずれも、慣例にとらわれない自由なスタンスなのが興味深い。二〇二四年度には、JR青森駅の新駅ビルが完成予定だ。進化するまちの姿や、埋もれていた魅力を意識する状況が生まれれば、市民のモツケの魂が騒ぎだすのではないだろうか。

「青森市発祥の地」ともいわれる「善知鳥（うとう）神社」。市の中心部に位置し、商店街の活性化を目的としたイベントも開催されている。

青森湾に面する高さ七六メートルの「青森県観光物産館アスパム」は、まちのランドマーク的存在。三角のデザインは、青森の頭文字「A」をイメージしている。雪景色の写真は、十一月下旬の撮影。

第三セクターが運営し、青森市と県南部の三戸町を結ぶ「青い森鉄道」。市内には七つの駅があり、通勤、通学の利用客は多いが、より利便性を高めるために新駅の誕生が望まれている。